

左ふ水沈飴す 6 笑 や つ 包 き 列 Ø \mathcal{O} \mathcal{O} 頭辛 し沢始めなせ 兄塚な機ふ骨夷 \mathbb{H} 浦苅坂澤澤田 た きか 美 ま 土 真 一 利 淳 葉 津

子 子 乃 き 子 火 泉 炷 枝 基 月

遠月 兼待一春根夜兵甘魚。鬼怨摇 咄 士 蔗 沼鷺 北鷺 る \mathcal{O} の狩 つ 白に ら象 () T かゞ に 日 鳥 返 さ く や 館 忌 き し子すまり道

伊玉上小中丸栗矢渡幹堤奥佐

藤井脇宮岡山原島

秀 草 靖 代

子之修子人子子惠駄聲

Ш

和利

沼柏

枝 雅

 \blacksquare

紀浪

井

由

はじめに。古諺がひかる。一期一会。金子兜太、大峯あきら、広瀬直人と旧知の先輩が次々と世を去られる。あのときいはかならに、あのように会えてよかったとの思いがつよい。「岳」四に、あのように会えてよかったとの思いがつよい。「岳」四に、あのように会えてよかったとの思いがつよい。「岳」四に、あのように会えてよかったとの思いがつよい。「据直人と旧知の先輩が次々と世を去られる。あのときはじめに。古諺がひかる。一期一会。金子兜太、大峯あきば。

風除植ゑし夜は ― 地貌季語「風除」への愛情

風除植ゑし夜は焼いわし香ばしき 佐藤 映二

地域への愛情が十分に伝わる一句と思う。 九十九里詠である。太平洋に臨む砂浜は冬に風が強い。それ十九里詠である。太平洋に臨む砂浜は冬に風が強い。その成砂が舞い上がる。海岸沿いの畑では藁を一握りずつVのため砂が舞い上がる。海岸沿いの畑では藁を一握りずつVという。いわしも浜の産。句材といゝ表現といゝバランスがという。いわしも浜の産。句材といゝ表現といゝバランスがという。いわしも浜の産。句材といゝ表現といゝバランスがという。いわしも浜の産。句材といゝ表現といゝが表別といゝである。太平洋に臨む砂浜は冬に風が強い。それ十九里詠である。太平洋に臨む砂浜は冬に風が強い。それ十九里詠である。太平洋に臨む砂浜は冬に風が強い。それ十九里詠である。太平洋に臨む砂浜は冬に風が強い。それ十九里詠である。太平洋に臨む砂浜は冬に風が強い。それ十九里詠である。

揺るるたび勁くなる木や草城忌 奥山 源丘

魚沼郡木鋤もて羽子つくや 幹 自聲

りがすぐれた作。 地貌の目配 動での羽子つき。上品さよりもおかしみがある。地貌の目配 のような平安貴族の上品な遊びが、ところ変れば田起しの木 のような平安貴族の上品な遊びが、ところ変れば田起しの木 のような平安貴族の上品な遊びが、ところ変れば田起しの木 のような平安貴族の上品な遊びが、珍しい着眼に注目し を選ぶがある。地貌の米どこ

甘蔗刈期一揆の如く村うごく 渡嘉敷皓駄

揆のように起ち上った感じだという。「村うごく」が不気味が縄はどこも甘蔗刈の盛んな一月を迎える。一村全体が一

いながら、戦がない平和とはなにかを問う作のように読める。別天地。いっせいに揺れる甘蔗穂波。甘蔗刈や甘蔗穂波を詠ば甘蔗穂波」も沖縄の東風平讃めの作。戦がなければ沖縄はさを超えた底力を感じさせる。同時作「東風平は島の真秀ろ

兵士いま白象となり雪の道 矢島 惠

る。そんな作。

る。そんな作。

のと思う。句風にいちだんと幅が生れつゝあな抒情句を得手とする作者が大胆な句材に挑み、太々した作で「白象」と化している。雪中行進のぎりぎりの姿。感覚的でのユーラシア大陸詠か。進みゆく兵士が折からの雪の中雪のユーラシア大陸詠か。進みゆく兵士が折からの雪の中

今月の秀句

鬼北や日がな原爆資料館 堤 保徳

「鬼北」は中国地方の二月の北風という。広島にある「鬼北」は中国地方の二月の北風という。広島にある「鬼北」は中国地方の二月の北風という。広島にある「鬼北」は中国地方の二月の北風という。広島にある「鬼北」は中国地方の二月の北風という。広島にある「鬼北」は中国地方の二月の北風という。広島にある「鬼北」は中国地方の二月の北風という。広島にある

夜咄や見知らぬ顔が振返り 栗原利代子

といって、人の貌ほど恐いものはない。端の嫌なおどろき。心がじーんと暗くなる。なにが恐ろしい怪談めいた一場面を連想する。暗い燭のもとで振り返った途怪談めいた一場面を連想する。暗い燭のもとで振り返った途へ で咄が冬の季語。夜咄の茶事も名高い。炉の季節に行われ

根開きの一つ一つに菩薩さま 丸山 靖子

信仰心を搔き立てるような緊まった思いになる。たものであろう。雪解の木の根開く光景は、ひかりを集め、表現は、根開きの雪の輪一つ一つに菩薩がいる荘厳さをいっ雪解の木の根に菩薩の石仏が置かれている景か。中七音の

春の虹すつからかんに愛燃やす 中岡 草人

「菊焚きて指を千手に与くべく」にも目を留めた。面設定は健康的な感じ。陰湿ではない。岳集に投句されたがった愛ではなく、とことん尽くす愛。春の虹のもととの場がった愛が伝わる。上品で愛燃やす」に注目した。激しい愛だ。「すつからかん」の「愛燃やす」に注目した。激しい愛だ。「すつからかん」の

一里一尺土人形の越後獅子 小宮山秀子

が土人形。その越後獅子の旅姿には哀愁がある。「一里一尺」のいい例句を得た。雪深い地の郷土愛の結晶

拓くことば® 自句寸言図「治郎の顔大尽」

人参の花のぶつかり合つて晴れ

昭和62年

「岳」(昭和六十二年十一月号)所載。前書「信濃追「岳」(昭和六十二年十一月号)所載。前書「信濃追「岳」(昭和六十二年十一月号)所載。前書「信濃追」

いだった。好きな町だ。『春の鹿』所収。 「岳」(昭和六十二年十一月号)所載。飛驒高山へはよ 「岳」(昭和六十二年十一月号)所載。飛驒高山へはよ が晴れのつもりて飛驒の蠟燭屋 昭和62年

もいなかった。素直なお嬢さんで好感を抱いた。「年の君が不意に亡くなった後で、藩士の出とか、律儀な母親が日課。彼が癌になり、娘律子さんが看病していた。細が日課。彼が癌になり、娘律子さんが看病していた。細が日課。の 顔 大 尽 と 思 へ ば 冬 昭和62年治 郎 の 顔 大 尽 と 思 へ ば 冬 昭和62年

収。収。以前は「萬緑」に在籍した論客。句集がないのがさみし次院での葬儀に弔辞を読んだ。わが世も終わりだと哀切久院での葬儀に弔辞を読んだ。わが世も終わりだと哀切久院での葬儀に弔辞を読んだ。わが世も終わりだと哀切体まる思いを籠めた。「岳」初代事務局長。彼は「鷹」体まる思いを籠めた。「岳」初代事務局長。彼「鷹」 (富士見書房・平成七年刊) 所述まる思いを作り上でのが、整った立派な顔をしていた。男の憂いが作り上でいが、整った立派な顔をしていた。男の憂いが作り上でいが、整った立派な顔をしていた。男の憂いが作り上でいが、整った立派な顔をしていた。治郎は少しごという。

の秘かな看板のようで、愉しかった。『火に椿』所収。熱帯魚がぱんぱんなお胎を抱えている。盛んなデパート京にいた長女が見立てた。嘱目吟。梅雨時で、目高程なで背広を仕立てた。徳子が安物買いは駄目だといい、東「鷹」(昭和六十三年八月号)所載。珍しく新宿伊勢丹虹昌高の胎落ちさうな 昭和33年

梅雨はたと止む天上に誰かをる 昭和63年

の采配を感じた。『火に椿』所収。と前書。「岳」の初期無鑑査同人、野見山朱鳥の高弟。と前書。「岳」の初期無鑑査同人、野見山朱鳥の高弟。と前書。「岳」の初期無鑑査同人、野見山朱鳥の高弟。

待春や不遇くらいが丁度良し 上脇 修

うのも当然。病んで人間の気持は深みを知る。省みる心中はいかばかりかと感銘した。春を待ちながらというつぶせの状態で苦しい姿勢をとらざるを得ない者にとり、別離の手術をなさったとうかがう。小林編集長と同じ病状。剝離の手術をなさったとうかがう。小林編集長と同じ病状。網膜行に「仰向けは自由のひとつ冬日向」とあり了解した。網膜行不遇くらい」とはなにかと気にしていたところ、岳集投

兼好のいよいよ親し冬菫 玉井利之

石ではないが、「冬菫」への共感もうなずける。木のか知らないが、兼好への着眼がおもしろいと思った。漱った。掲句はどんな点から『徒然草』の作者に親しみを抱いり名人の兼好像ではない、俗世の兼好の素顔らしき一面を知 私も最近新しい資料による兼好伝を読み、悟り切った世渡

寒垢離の飛沫に殺気ありにけり 伊藤 和子衆 できょうき

るが、立句の風格をもった一句と感心した。手堅い作。の滝水の飛沫の清冽さを「殺気」と言った。当然とも思われの者は寒垢離の修行者があげた飛沫に触れたものか。寒中

としよりの死別は淡し枇杷の花 国見 敏子以上の他に雪嶺集、前山集からの推薦候補作をあげる。

帆柱に鳥の高鳴き春隣 北野芳夫狼に魘されてをり喜歩が直ぐ 柏田 浪雅

遠富士の白は贅一 富士誉めの秀逸

遠宮士の白は贅七日粥、沼井由紀枝とっちいい。

七日粥の緑の対比もあざやか。申し分ない新年正月の作。仰ぎ、一年の息災を願ったもの。遠近の構図も、富士の白、えた。七日の朝、七草粥を食べながら長命この上ない富士を白雪に耀く富士の遠望を「贅」(天からの賜りもの)と讃

水音に微かなぬめり花辛夷 島田葉月

迎えた女体の反応か。明快な微妙さだ。
た体感的な思いを押し出す。そんな感じが「ぬめり」。春をた体感的な思いを押し出す。そんな感じが「ぬめり」を感じとった感性は鋭い。水は冬の間の灰汁のな「ぬめり」を感じとった感性は鋭い。水は冬の間の灰汁の辛夷は早春にいち早く咲く。その頃の水音に纏いつくよう

雪のチセ裏手に祀る熊頭骨 大澤淳基

る」には、ひそやかに、しめやかに行われる熊祭への連想を美しい。熊祭の骨格のみを詠まれた句であるが、「裏手に祀うに山の方向に向ける。頭骨への頭飾りには削り花が施され祈りの詞を述べ霊を神の国に送るもの。熊の霊が山に帰るよ「チセ」はアイヌの家。熊祭は子熊の頭骨(マテプト)に

搔き立てる沈黙があり、惹かれた。

なやらひの夕べまつ赤な下着買ふ 吉澤 利枝

い気合が入った女性作家。慕う人も多い。鬼との相談の上のこと、心配する必要はない。じめじめしない。かえってよろこんだ鬼が去りがたい気もするが、それはない赤いパンツ(女性用)を買ったというもの。心意気がいない赤いパンツ(女性用)を買ったというもの。心意気がいない赤いパンツ(女性用)を買ったというもの。心意気がいない赤いために鬼に負け

上薺摘 む 低 空 の 軍 用 機 一井坂 一炷

る。 状肯定能力は生きる力であるが、感性を鈍らせる基でもあ慣れてしまい、気にしないことがおそろしい。人間にある現慣れてしまい、気にしないことがおそろしい。人間にある現いまだ米軍の基地がある。いつの間にか、軍用機の飛行にも基地近い野を連想する。沖縄ばかりでなく日本には各地に

寒鯉のがばつと浮世離れかな 穂苅 真泉

識からの切れが感じられる。俳句は努力の継続が力。いた鯉が自らの夢に驚き、唐突な動きをしたもの。着眼に常ろい。突然水面から跳躍したものか。寒に耐え水底に沈んで寒鯉からはすぐ想像されない「浮世離れ」の諺語がおもし

笹起きる遠流の島の火葬塚 三浦 土火

作者の母なる故郷、隠岐詠。「笹起きる」という雪解一点

院御集)のつよがりもなんともかなしい。れこそは新島守よ隠岐の海の荒き波風心して吹け〉(後鳥羽後鳥羽院御製以来のかなしみがしみじみと伝わる思い。〈わ眼し詠うところながら、地貌季語を配したことで島をつゝむの把握に実感がこもる。十二音は島を訪れた者がしばしば着

冴ゆる夜や遠き列車の母と兄 秋野美津子

腕力の素朴さが独特の土の匂いを放つ。故土は島田宿。ひびきが迫る。詠う思いがいつも溢れるばかりの作者。その亡き母と兄か。引き揚げの光景か。「遠き列車」の冴えた

野火奔れ弱気の虫を焼き尽くせ 佐藤たまき

もわれわれに伝えている。親が子にいう言葉でもよい。自らに言い放った句。春先の野火は太古以来の火勢をいま

青年の証の匂ひ炬燵かな 吉田かん乃

呼び出す力あり。着眼に俗すれすれの力がある。 春年の体臭がこもる炬燵。セクシャルな一句にして、春を

すんずらに沈まぬやうに身を竦め 牧野きよ子

てきたかな。おかしみも加わって愛すべき俗言と思う。その地の作者。土俗の用語には底力を感じる。いくらか肥っ「すんずら」は富山県井波地域の方言。春先の凍渡をいう。

飴獅子の鬣受くる年始 柾木幸子

子舞を「飴獅子」というらしい。珍しい獅子舞の称。地出雲崎にも飴市ありと、作者が伝えてくれた。その折の獅松本には塩市から代わった飴市の正月行事がある。良寛の

沈みゆく雪の鼓動や軽井沢・島形英美子

の雪であろう。雪に弾みがある。(『山脈』)と詠う。楸邨の捉えた雪よりもいく分春めいた折軽井沢の雪を楸邨は〈落葉松はいつめざめても雪降りをり〉降りゆく雪片に鼓動を感じたものか。積った雪ではない。

今月の秀句

月蝕や狩に斃れし鳥獣 柏田浪雅

きには決まって見られる光景とみた。 を曝しているだけで迫力があるのではないか。月蝕のとか常套的。そこまで話を興さないで、斃れた鳥獣が亡骸の獲物たちの魂の蘇生をイメージした幻想。すこし話がの獲物たちの魂の蘇生をイメージした幻想。すこし話がの獲物たちの魂の蘇生をイメージした幻想。すこし話がいまないかと提案。添削例を示した。原句は月蝕の夜、狩には決まって見られる光景とみた。

水温む笑ひゐて死を遣り過ごし 平澤寿美枝

ったという。死を見ぬふりをしたのではない。のもののご老人詠であろう。死の方が通り過ぎていってしま。こんな人生が送れたら最高ではないか。高齢ながら壮健そ

ふくれつ面の餅の腸蛻なり 細川はじめ

る。 鹿馬鹿しいおかしさがあり、余裕派らしい作者の笑みがあ 膨れた焼餅の中がうとんぽ。それを「腸蛻」とは着眼に馬

左義長や火の入る前の静けさよ 松澤 勝彦

た。この気付きから俳句が立ち上る。き、騒がしく炎に包まれるまでのときを「静けさ」と捉えき、騒がしく炎に包まれるまでのときを「静けさ」と捉え働取り立てていうほどの発見ではないが、平常心がよく働

以上の他に岳集推薦候補作を掲げる。

が初ば遥ばも の の音なべて籠れる牡疹のひとつ残れる汀か 雪響な 石田 岡本 洞口 村田 河合 西海千賀子 経治 哲彦 朋美 照子 貢